

## 「土佐の教育改革フォーラム」（高知市会場）概要

日時	平成19年2月4日（日）13:30～16:00
場所	県立高知追手前高等学校芸術文化ホール
出席者	教員、保護者、県民一般350名 渋谷教育委員 山崎教育委員 中澤教育委員 河田教育委員 大崎教育長 他事務局職員

### 1 開会

### 2 あいさつ(県教育委員会)

### 3 土佐の教育改革について(県教育委員会)

### 4 パネルディスカッション

テーマ	「これからの高知県の教育について」	
コーディネーター	高知大学教育学部助教授	平井貴美代
パネリスト	教育改革10年を未来につなげる会座長	半田久米夫
	高知市小中学校PTA連合会理事	関田 浩美
	土佐市立波介小学校長	森本 孝教
	高知市立一宮中学校長	岡村 光幸
	高知縣市町村教育委員会連合会会長	西森 善郎
	高知県教育長	大崎 博澄

### 要旨:土佐の教育改革について(県教育委員会)

#### 大崎博澄高知県教育長

皆様のお手元の、リーフレット「翔べ 土佐の子どもたち」を使って経過説明をいたします。

私達は、平成8年に県民の皆様の様々な要望に応えるために、県内の様々な方々30数名によって構成される、「土佐の教育改革を考える会」を組織して、これからの高知県の教育をどうしていったらよいかという議論を起こしました。そして、この県民の皆様の提起を受けて、平成9年から土佐の教育改革に取り組んでまいりました。

土佐の教育改革の際立った特色は、県民の皆様の参加と共同による改革であったと私は思っています。それが充分にそのような趣旨で貫徹をされたかどうかということは、これからの評価になると思います。

次に、取り組みの内容ですが、考える会の議論をふまえて、改革の柱として、子ども達の基礎学力の定着と学力の向上、教職員の資質、指導力の向上等、六つの柱のもとに様々な取組を行っていました。

県教委事務局で、土佐の教育改革の評価をするための資料作りを行いました。本来にありとあらゆる取組をやってきたというように思っております。この一部をこのパンフレットの1ページに主な取組と成果というかたちで表示をいたしております。

このように多様な取組を行ってきた土佐の教育改革をどう評価するか。実は、このことで私達は、少し悩みました。数値データや統計として表れるもので評価をすることが一番客観的です。ただ、教育には数値だけでは測れないものがあると私は思います。そういう意味で悩んだ末に、実感による評価と数値データによる評価の両面から検証しようということにしまして、この実感による評価とデータによる評価の代表的なものを2ページに表で掲げています。

実感による評価では、まず、教育の客体である子ども達、保護者の皆さん、教育に直接関わる教職員の皆さん、それから、地域住民の皆さん。79万県民の内の約12万人の県民の皆さんにご参加をいただきましてアンケート調査を行いました。その結果がこの2ページの上の四つの表に出ています。

この中で、「学校への満足度」についての肯定的評価は、幼稚園、公立小中高等学校、それから盲聾養護学校の保護者の皆様から、80%から95%という非常に高い評価をいただいております。教育に対する非常に厳しい状況、厳しいご批判のある中で、これだけの評価をいただけたとは思っていませんでした。これはまた、全国での同種の学校満足度の評価に比べても相当高い数値です。

ただ、一方で、その下に「わかる授業」に対する肯定的な評価、「悩みや困ったことについて、気軽に先生に相談できるか」という設問に対する肯定的な評価、「子ども、保護者、地域の声を聞いて学校運営に反映しているか」についての肯定的評価という三つの表がありますが、これについては、中高と学校が上がっていくにつれて評価が下がってくる傾向を示しています。

特に、「悩みや困ったことについて、気軽に先生に相談できるか」という設問に対する評価については、中学校、高等学校では非常に低い割合を示しています。このように学校満足度は高いけれども、そのバックに本当にそれを支える内容があるかどうかという点では、光と影があると感じています。

その下にデータとして現れるものが掲載されています。まず国公立大学への進学者数でございます。公立高等学校からの国公立大学の進学者数は、私立高等学校を抜き去って、非常に高い水準で、現在350名以上という状況が出現しています。また、これとあわせて、名門私学といわれる高校に遜色のない県立高等学校も誕生しております。これは光の部分であると思います。

しかし、いじめの発生件数、不登校児童生徒の発生割合、高校中退率は、それほど顕著な改善の兆しをみせていません。不登校については、大体900名から1000名の小中学生が学校に行けない状態にあります。中途退学については、400名から500名の中途退学者が続いているというような状況があります。非常に深刻な状況です。これがデータで見る、光と影の状況です。

次に、このデータを取り揃えて、「土佐の教育改革を考える会」の延長線上にある「教育改革10年を未来につなげる会」で県内各会の32名の皆様にご参加をいただき、4回にわたって議論をいただきました。その内容が、3ページの上のほうにあります。

この「未来につなげる会」の総括としては、土佐の教育改革の方向性は、妥当であったということでした。ただ、残された課題が非常に深刻であり、これに対する焦点を絞った対策を講じていくべきだということで、大きく二つの提言がありました。

1点目が「教育の構造改革」、2点目が「家庭、地域の教育力の再生」です。言葉に集約しますとこの2点になりますが、内容的には非常に幅の広いものを含んでいるものです。私共はこれを踏まえまして、県教育委員会としての取組方針をこのほど取りまとめました。これも踏まえて、本日のフォーラムで皆様にもご議論に参加していただきたいと思えます。

簡単に県教委の取組方針にふれます。

まず、3ページの下の方に、「基本的な考え方」、「取組の目標」、「取組の視点」という三つの総論を書いています。

基本的な考え方としましては、1点目が開かれた学校づくりや授業評価システムなど、土佐の教育改革で築いた参加と共同による教育づくりという方針を引き続き継承し発展させていきたいということです。2点目は、教育的な風土づくりを県民的な運動に高めていくために、県民、教育現場、教育行政の信頼関係を築いていきたいということです。

取組の目標としましては、誰にもわかり、どなたにも共通理解が得られることを鮮明に記しておきたいということで、信頼される学校をつくること。教育的な風土をつくる。この二つを目標として掲げております。

3点目の取組の視点は、私達がこれから高知の教育を動かしていくための哲学の部分で、5点挙げております。

- 1点目 子どもの視点に立つ。
- 2点目 現場の視点に立つ。
- 3点目 連携の視点に立つ。

この三つは、ある意味では最大公約数的な、どなたにも納得のいただけるものですが、本当にできているのかどうか。私達がいつも胸に繰り返し問わなくてはならないことだと思っております。

4点目は、「課題の根本的な解決の視点に立つ」です。私達はこれまで、痛いところに膏薬を貼るような対策に終始してきたのではないだろうかと思えます。教育における課題の根本的な解決をはかることは、膏薬を貼っていく事ではできないのではないか。そういう意味で、量から質へ、対処から予防へ、個別から総合へと、対策の重点を移す発想の転換が必要ではないかという問題意識がこの4点目です。

また、5点目では、時代の変化に柔軟に対応しながら教育のあるべき姿を追及していき続けたいということを考えています。様々な教育についての論議がなされておりますが、土佐の教育改革は、そういった論議よりも、多分、遙かに進んだところを行っている私達は自負しています。これをさらに引き続き発展をさせていきたい。そういう思いを込めて、この5点目の哲学は記してあります。

それから、4ページ、5ページ、6ページが、提言に対する県教委の対応方針で各論にあたります。ただ、これは内容が膨大になりますので、この後のパネルディスカッションに譲りたいと思えますが、私達は、土佐の教育改革で提起した二つの明解な方法論「授業の改善」と「学校を開く」という明解な方法論を堅持しながら、県民運動としての教育改革を続けていきたいと考えております。

#### 要旨：パネルディスカッション

#### 平 井コーディネーター

前段では主に「土佐の教育改革」についての、先ほどの大崎教育長からのご説明をもとに、パネラーそれぞれの立場から総括、提言、或いは県教委の取組の方針について、どう受け止めたのかということについて、ご意見をうかがっていきたく思います。それを受けまして、皆様のほうからご質問、あるいはご意見等をおうかがいしたいと思っております。

まず、半田座長、よろしく申し上げます。

#### 半 田

一期目が始まった時には、飲み屋さんに行っても、どこに行っても、「高知の学力は」、「学力は…」ということで、ある時は先生方の悪口を言い、ある時は行政の悪口を言い、ある時は組合関係の悪口を言うような状況でした。第一期目は、それを、県民ぐるみで舞台上上げて議論をしようということで始まりました。

これを立ち上げたということに一つの大きな意義があったと思えます。柱は、一つは学力の問題。そのためには先生達の質の向上。もう一つ、学校だけでは教育は駄

目だろうということで「開かれた学校づくり」。この柱を進めました。

第一期の5年間の中では、地域、学校、それぞれの温度差が出たなと感じました。ただし、この運動を通じて先生達、或いは保護者達の意識がちょっと変わってきた。これが第一期の感想でした。

その反省に立って二期目は、学力の向上を柱において、教職員の資質・指導力の向上を図ってきましたが、高知県の子ども達を育てていくうえでの理念が必要だということで、「郷土を愛し、世界にはばたく、心豊かでたくましく、創造性に満ちた子ども達を育てる」ということを一つ柱におきました。

そのためには、感性豊かな子ども達、或いは人を大事にする子ども達、いじめのない学校、そして、不登校やそういうものの無い子ども達を育てていこうということで、二期目は新たな要素を加えたわけです。

家庭、地域の教育力については、よみがえらそうということで、あえて私達は、「再生」としました。こうすることで、第二期は進んでいきました。

10年間やって、確かに今、大きな成果を得たと思います。しかし、まだまだ光と影の部分が残っているということで提言申し上げましたのが、「未来につなげる会」の提言ということです。

そこで、一番私が議論したのは、高知県の教育は、学校現場や教育行政にだけ任せてできるものではないということです。「教育再生会議」ではさまざまな議論をしていますが、我々は高知県ぐるみで理想とする子ども達を育てていこうということです。

どう評価したかという、教育は10年ぐらいでできるものではないのですが、まあよくやっているという感想です。ただし、その中で、責任のはねかけ合いはなくなったが、学校にも地域にも先生方の中にもまだまだ温度差があるということが実感です。

どうレベルアップしていくか。そして、いかに家庭を引っ張り込んでいくかということです。学校と家庭の役割分担をもう一回見直す必要があります。

なお、この未来につなげる提言のテーマですが、色々考えた末、「翔べ、土佐の子どもたち～教育新時代・こうち～」ということです。国の「再生会議」よりずっと垢抜けしていると感じています。

**平井コーディネーター**

次に、関田さんのほうから、意見いただきたいと思います。

## 関田

子どもを育てている保護者の方が、この土佐の教育改革の中身をどれだけ知っているかというのは…。私達もPTA活動の中で関わっていくうちにその中身が何であるかということを知りました。

学校の先生方でも、まだ充分把握していない方もいらっしゃるということです。今回私も含めて何名かの保護者の方が、この「教育改革10年を未来につなげる会」に参加しましたが、32名のメンバーで4回の議論という本当に短い中で、それをまとめていくということを知って驚きました。

県教育委員会の方々がデータを集めたりとか、アンケートをとったりとか、いろんな組織の議論の中で積み重ねてきたものを参考にしながら「未来につなげる会」は行われました。ただ、本当に教育のことを考える時には、書いたものを読んだり見ただけで判断するのではなくて、まず学校の中がどうなっているのか、家庭の中がどうなっているのかということを考えなければ進んでいけません。

未来につなげる会」の中では保護者の代表の方からもさまざまな声がありましたが、私達保護者としては、やはり家庭が大事だと思います。家庭がしっかりしていれば、子ども達は成長していきます。

しかし、社会自体もそうですが、本当に子育てをする環境についても温度差があります。財政的なこともあります。子どもに関わる保護者に、本当に一生懸命子育てをしている方と、自分の楽しみを一番にして、子どものことを後回しにしているような保護者の方達もいます。PTA活動の中でも、入り込めない部分もあります。

私達に何ができるかといった時に、「土佐の教育改革」の中で考えていける部分があると思います。

「未来につなげる会」の提言は、是非、この書面の中だけに残しておくのではなく、活用していただきたい。先生方、保護者、教育行政それぞれに思いがあり、また、地域の方々とか、それぞれ子どものために何かをやりたいと思っていらっしゃると思うので、この提言を基に、これから一つになってやっていきたいと思います。

## 平井コーディネーター

提言を是非とも活用して欲しいという強いお言葉をいただきました。

次に、小学校で実際に教育を担うという立場からのお話を中心になるかと思えます。森本さんからよろしくをお願いします。

## 森本

本校は、「子どもたちが楽しく学べて、愛する人が気軽にこられる地域の学校」を目的に「内外に開かれた学校づくり」をその手段として、日々取り組みを展開しております。児童数は90名の小規模校です。3世代同居家庭が約50%でPTA活動が積極的に行われています。

さて、県民参加の新しい手法で全国に先駆けてスタートした、土佐の教育改革の取り組みが徐々に根つき、全国からも注目されている存在となっていることに県民の一人として、そして教育関係者の一人として、本当に嬉しく思います。残された教育課題と解決への方向性をまとめた報告書、並びに県教育委員会の対応方針を聞かせていただきました。さすがに適確な分析がされ、具体的な方針が示されていると思いました。

中でも、私が印象に残ったのは、提言をふまえた県教委の取り組みの視点です。特に4番目の「当面する教育課題の根本的解決をはかるため、量から質へ、対処から予防へ、個別から総合へと、対策の重点を移す発想の転換を行う」という点です。

土佐の教育改革は、ここ10年で確実に前進したと私は感じています。なぜなら、私自身、開かれた学校と言え、千葉県の秋津小学校。学びの共同体といえ、神奈川県横浜市の郷小学校というように、以前は、県外の学校が頭に浮かんでいたのですが、今では、食教育といえ、南国市、学力向上のためのモジュール授業といえ、室戸市立三高小学校、小中一貫教育といえ、加茂小中学校や大川小中学校というように、県内の市町村や学校がすぐに浮かぶようになりました。特色ある取り組みや学力向上の成果等がたくさん聞こえて来るようになりました。本当にうれしいことです。

先ほど、取り組みの温度差や上滑り感が懸念されているということがありました。それは、地教委の取り組み次第で克服できるのではないかと考えています。現に土佐市では、土佐市の教育改革が推進され、各校の独自性と市内全小中学校が一斉に取り組む事柄が整理されて成果をあげています。教職員個人の意識の温度差はあっても学校間の温度差は、今はあまり感じません。その中で本校が歩んできた道筋は、間違いではなかったと確信しています。

そのことは、学校評価アンケートの結果にも表れています。本校では、学校・家庭・地域の連携こそが教育改革の根幹であるととらえて、平成11年度より様々な取り組みを展開してきました。当時、校長として現場に戻った私は、学校現場と教育行政との教育改革に関する意識のギャップを強く感じていたからです。

夜の家族参観日、子どもの声アンケート、時間割編成の弾力化、スクールサロンの開設、全教員による社会体験研修、地域人材導入による学力向上策、地域コー

ディネーター、学習コーディネーターの位置付け、学校を地域に開く学習参加・参画の実施等です。活動の度に、子ども達の素敵な笑顔が見えとても楽しみでした。

実は、これらの活動を通して校長として一番狙っていたのは、教職員の意識改革でした。元々、意欲のある集団でしたので、数々の成果が表れました。新しい伝統も生まれました。一番うれしかったのは、社会体験研修をする時に、先生方の中から、「校長先生、やるやったら、皆で一緒にやろう。全員がやろう」ということで、猛暑の中、全員が社会体験研修に出かけました。「伝統は、改革の連続である」と私は実感しました。

保護者や地域の方々が児童や教師と一緒に授業をつくる、学習参加・参画という学習形態があるんですが、ご来場の皆さんには、それを自信をもってお奨めします。是非やってみてください。これは、子ども達、保護者、教職員、三者それぞれにメリットがあります。そして、本当に素敵な時間が流れます。算数、国語、社会、いろんな教科等でできます。いろんな人の力をお借りして、授業を創造すること、デザインすることがいかに素敵なことかということがわかっていただけたと思います。

#### 平井コーディネーター

今度は中学校のほうのお立場も含めて、岡村さんよろしくお願いします。

#### 岡村

中学校問題ということが最近よく言われております。確かに、中学校は問題を抱えています。解決する根本は「荒れ」の克服だと考えています。学力やさまざまな問題解決は、荒れた状況の中では難しいと考えております。

一宮中学校は、生徒数は500人前後ですが、校内には、ゴミが散乱する。お菓子の食べカスは、どこにでもある。トイレで煙草を吸いながらご飯を食べている。エスケープがある。盗難がある。喫煙がある。恐喝というか、先輩が来て、お金を盗っていく。それから、いじめ的なこともたくさんありました。

そういった問題を解決するために、まず環境の美化に取り組みました。6時半に門を開けますが、その後7時くらいに有志の先生が登校して、ゴミ拾いをします。毎日ゴミ袋に3つくらいゴミがありました。それを7時から7時半の間に片付けてきれいな状況で生徒を迎えるということを徹底して行ないました。きれいになるまで半年くらいかかりました。

二つ目に挨拶に取り組みました。朝の挨拶運動。それから、下校の時も先生が出て指導するというを行いました。

三つ目に、朝の読書に取り組みました。目的は国語力を高めるとか本が好きにな

るとか色々あると思うんですが、生徒指導の一環として取り組むことにし、付加価値は求めない、とにかくシーンとした状態をつくってくださいということで始めました。朝の読書は1日の始まりですが、授業の始まりも集会などの始まりも、とにかくシーンとした状態で始めることにしました。

この三つは誰にでもできて継続できることです。こういうことを続けていくことが基本として大事だと考えています。

先日、丸の内高校の浜田校長先生と一緒に話をしましたが、基本的には同じ考えです。丸の内高校が何で今のような学校に変わったのか。環境を変えるとか、子どもが来たい学校に変えていく。そういったこと徹底してやっている。ある本の中に、「凡時徹底」という言葉がありました。普段やっていることを徹底してやることから改革が始まる。私もそのとおりだと思っております。

いろいろな問題を繰り返す子ども達もいますが、一步も二歩も下がってその子ども達を見るのではなく、教師の方から打って出て徹底的に関わる、そして、関わりきる。そういう教師がいてくれたことが、落ち着いた学校になった大きな要因だと思っております。

「教育改革10年を未来につなげる会」の提言をふまえて、中学校問題解決のための集中的な対策ということで、それぞれ大事なことが書かれていると思います。例えば、子どもの実態把握については右側の黄色いほうの中に、「子ども達の学級での」とありますが、私はこの「学級での」というのが、一つのキーワードだと考えています。学級というシステムは日本の教育の非常に優れた部分だと思います。40人もの生徒を教育する基本がこの「学級」なんですね。学級経営ができる日本の先生は、世界で一番優れた教育者ではないかと考えています。

開かれた学校づくり推進委員会は、現場からすると、「何でこれがPTAでは駄目なのかな」という疑問が正直ありました。例えばデンマークであれば、「学校委員会」があって、予算や人事まで学校教育に対する責任と権限を持っています。ところが、開かれた学校づくりの委員さんには権限も責任も無い。そういう意味で、何でPTAではダメなのかという感じがしております。

根本は、安心して過ごせる学校。これが基本にないと学力や文化は育たないのではないかと考えております。

学校の先生たちは本当にお人よしの集まりです。現場を、委員会やPTAが支援していくシステムが必要です。逆に言うと学校現場での信頼される実践が必要ですが、そういう視点で是非お願いをしたいと思っております。

## 平井コーディネーター

今回は、市町村教育委員会で教育行政を担う立場というところから、西森さんにご意見をうかがいたいと思います。

## 西 森

私は11年前に南国市の教育長に就任いたしました。そして、この10年間、当事者として関わりをもって参りました。「土佐の教育改革は、成功しているんですか、必ずしもそうでないのですか。」という質問を多くの方々からいただきました。私は3年ほど前から、「間違い無く土佐の教育改革は、県民の期待に応えつつある。」と確信をもってお伝えをして参りました。この評価は、全く今でも揺らいでいません。

教育にとって一番大事であることは、相互信頼だと思います。これが無い中で、高い技術を持って教育にはならないと思います。その相互信頼がどうなったかということで、一点だけ、まず一つ評価をして参りたいと思います。

今日も教職員団体の皆さんがお越しです。このテーブルに全ての教職員団体がついていただいたということです。幾つかの教職員団体があります。一つの考え方でないから幾つかに分かれています。そういう状況の中で、相違点を探して対立し合うのではなくて、共通点を求めて連帯、連携をするこの10年であったと思います。この改革への教職員団体の取り組みは、高知県の教育史に大きく残っていくものだと思います。そのことが10年前と今が大きく違っているという環境です。教職員団体の皆さんに敬意を表しておきたいと思います。

確かに、中学校の授業の問題については、特化して取り組むことになりました。多分、算数、数学に特化をして取り組む方針が県教委から示されていると思います。いじめの問題もありましょう。不登校もあります。積み残した課題があることは間違いありませんが、まさに県民が一緒になって取り組んできたこの10年は、皆さんと一緒に高く評価をしようではありませんか。

先日、高知県の都市教育長会議が開催されました。都市は11市でございます。その中で、香南市の島崎教育長が、次のような発言をいたしました。「学校の垣根は低くなったとよく言われる。しかし一方で、垣根がなくなったという言葉は聞こえてこない」ということです。私は一瞬、はっと思いました。私は、随分低くなったというところで評価をしてきたように思います。しかし、まだ垣根が残っているということを、県民は知っているのだと思います。これから先は、「垣根がなくなったね」という状況つくっていくべきではないかと思います。

10年目は一つのゴールであることは間違いありません。そのゴールをスタートにする決意とエネルギーを今日、フロアの皆さんと私達で共通のものにしていきたいと

思っています。

#### 平井コーディネーター

5人のパネラーからご意見が出されました。それを受けてフロアの皆様からも、色々のご意見、ご質問をいただきたいと思います。

#### フロア・女性

今回の提言と方針で、一番共感を感じましたのは、中学校問題が具体的にあげられていることです。

私は中学校の図書館で司書のボランティアをしていて、中学校の3年間を見てきました。私は東京のほうに長くいましたが、高知の中学生にも他所の県と同じような環境が是非必要だと思います。

中学校は子どもから大人に、そして、自立していく、進路を考える、友達関係で悩む、人生の中で最も大事な時期だと思います。その時に学校の中で学力の向上等々のために、図書館が持っている力は絶対あると思います。その力を子ども達が活用できるためには、司書が必要です。小学校までは盛んに読書活動をしているのですが、その連続性が中学校で切れているのが現状ではないかと思います。

知りたい読みたいなど、学ぶことに応えるために、学校図書館に司書をおいて、一人ひとりの生徒に応えていくと同時に、先生方の授業を応援する教材センターとしての役割も学校図書館にはあり、岡山市など、効果を上げているところがあるのですが、高知でもぜひ考えていただきたい。

生徒の居場所としての図書館の大事さも感じているところです。

司書を学校図書館に置いていただければ、それを地域の人がボランティアで支えていくことができます。これが地域の教育力の発揮につながっていきます。学校図書館の問題を教育改革の取組の中に入れていただきたいと思います。

#### フロア・女性

熱心な先生がいるということは、学校の質の向上にもつながっていくと思うのですが、やはり学校間の温度差が広がるということは确实ですし、広がるということは、学力の格差もできるように思います。

私の知人には、引越しをしてまでいい小学校に入りたいという人たちがいます。高知市には現在、特認校制度がありますが、荒れた中学校には行きたくない、いい中学校に行きたいということで、特認制度を利用するという現状が実際にあります。私立中学校の選択を含めた学校選択制も考えながら、後半のディスカッションに期待し

たいと思います。

#### 平井コーディネーター

後段は、これからの高知県の教育のあり方や将来に向けての取り組みについて、パネラーのほうからご意見をいただくことになっております。

それでは、3時から後半部分を再開させていただきたいと思います。

(休憩)

#### 平井コーディネーター

貴重なご質問を二ついただきましたので、パネラーの方々に、二人のご質問についてのご意見をいただきたいと思います。

関田さんから、お願いします。

#### 関田

中学校で司書のボランティアをなさっている方のご意見についてです。

高知県でも絵本の読み聞かせを行ったり、保育園、幼稚園や小学校での読書活動も活発です。私自身も小学校で読み聞かせをしていますが、中学校になると、そのような関わりがしにくい面もあります。図書館のお手伝いは、何校かボランティアの方が活動しているということも聞いています。

ただ、保護者としては、専任の司書教諭がいて欲しいです。小学校でも、先生が兼任で図書室をやっているということで、専任の司書は、予算の関係で配置できてないという現状があると聞いています。専任の司書教諭の配置ということも今後検討していただきたい。

また中学校でも保護者のボランティア等をもっと活用できる部分を考えていただきたいと思います。

学校選択制ですが、私学、県立中学校もあり、特認校制度もありますので、保護者は、情報を手に入れて選んでいる現状があります。しかし、一生懸命取り組んでいる学校の様子がどこまで保護者に伝わっているかという疑問です。保護者が正しい情報をもったうえで、学校を選んでいるということはまず無いです。

よく、「荒れているからあそこの中学校は」と敬遠することも聞きます。校長先生方は悩んでいる部分が、あるのではないかと思います。

選択制については、まず選ばれる学校にすることから力を入れて欲しいなと思います。

私学と公立の学校との連携がなされていないのではないかと。私学に進んでいた

が、途中で公立のほうに返される子どもさんがいるということを聞きました。そういう時に私学と公立の学校はしっかり連携をとる必要があります。県立中学校でも同様です。

#### 平井コーディネーター

それでは、森本さんお願いいたします。

#### 森本

本校でも朝の10分間読書は平成11年度からずっとやっていまして、毎日落ち着いた雰囲気です。図書委員の児童が近くの保育園へ読み聞かせキャラバンに行くとか、保護者の方が朝読書の時に読み語りをしてくれることもあります。

今年はとてもラッキーな年でして、夜の参加日の時に体育館に1000冊以上の本が並びまして、親子でじっくり本を選びました。学校予算、PTAの予算、地域からの寄付を含めて100万円、約900冊。お陰様で良書が学校図書館に設備されるようになりました。

「読書は、知恵の果実」と言われますので、よく噛んで心の栄養にして欲しいなと願っています。

#### 岡村

はい。図書館の利用については、フロアの方のおっしゃるとおりだと思います。本校でも司書教諭はいませんが、国語の教員が意欲的に図書館活動をしております。

去年、赴任した時に、書架に空きがいっぱいありました。理由を聞いたら、「実は、盗まれるんですよ」ということでした。そこで、全部廃棄して、今年、百何十万円か、金額は忘れましたが図書を新しく入れました。

今は非常に健全な運営ができていると思います。利用する生徒も増えました。それから、図書委員会の活動も非常に活発です。いろんなポスターを作ってあちこち掲示板にはっていますが、それにいたずらする生徒もなく、いい雰囲気です。

司書教諭を配置していただけたらと考えております。本校にも居場所を求めている生徒がたくさんいますので、常駐する方がいたら非常に利用しやすいと思います。

学校選択制については、どこを選択してもいいのではないかと思います。高知市では選択制を実施しやすいですね。学校間が地理的にも近い。ただし高知県全体となると郡部は条件が異なりますので、考慮が必要だと思います。

保護者が選ぶというよりは、子どもが選ぶ学校。そういう選択制はあってもいいのではないかと考えております。

平井コーディネーター

それでは、西森さんお願いいたします。

西森

図書館の持っている力と言われました。また、生徒の居場所としての図書館づくりを目指して欲しいとも言われましたが、財政を伴うことについて、ここで「そういう方向でやります、来年やる」とは言えませんが、全く同じ思いを持っております。これは県単でというよりも、その役割を認めるのであれば、それぞれの市町村で、一定配慮すべきではないかと考えています。

学校選択制については、私が教育長に就任した時に、南国市の中学校のどこに進学するかは、親と子どもが決めたらいいいのではないかとということで、事務局で検討を命じました。しかし、何ヵ月も経たないうちに挫折をいたしました。議会を含めて大反対にあいました。理由は「地域文化を崩壊をさすのか」ということでした。

もう一つは、過度な学校間競争になりかねないということです。これから先は、大枠では自由に学校を選ぶ時代になっていくと思います。これから10年先に今のような学区制があるとは考えておりません。しかし、そうであれば、財政も含めて、よほどの見通しをもったものにしなければならないと思っていますから、にわかにはいきません。

南国市では奈路小学校という一番小さな学校で小規模特認校制度を実施いたしました。特認校にしなければ、多分今は10名ちょっとぐらいの小さな小学校になっていたと思いますが、今、40人規模の学校にまでなって、非常に良い運営がされています。これは、制度が出来たからこんなに子どもが集まっているのではない。奈路小学校が持っている地域の力、学校の経営力があって、あの学校へやれば、うちの子どもはこう育つというイメージがしっかりしているからです。大きな評価を得ていると思います。

この4月からコミュニティスクールとして、一定、市教育委員会が持っている機能を地域に移すこととなります。どこまで移せるかどうかは、まだ定かではありませんが、これから先は、学校選択制を視野に入れた学校づくりは、是非していきたいと思っております。

平井コーディネーター

南国市は本当に意欲的な取り組みをされていると改めて思いました。

それでは、大崎教育長のほうからもご意見があるということだったので、いただきたいと思います。

## 大崎

僕も学校図書館で育てていただいたという自分自身の経験があります。だから、学校訪問をする時に図書室を見せていただくのを非常に楽しみにしています。良い学校か悪い学校か、まず90%以上、図書室が良いか悪いかということだとわかんと思います。

まず、現状を申し上げますと、国の支援がいただける基準では、12学級以上の学校に司書教諭を配置するということになっております。それで、高知県では2名ずつ配置していますが、残念ながらこれは専任ということではありません。

それから、これとは別に図書館加配という事で、19名の教員の配置をしています。これは一定のエリアを受け持つというかたちの配置しか実現しておりません。そういう意味で司書の配置ということは私も熱望していますが、高知県の財政事情ということも含めて、現状はそういう状態です。

さきほど、ボランティアで図書室の運営に関わってくださっているというお話をお聞きをしました。高知市内のある小学校でも素晴らしいボランティアの方が、図書室の運営に入ってくださっていて、素晴らしい運営ができています。だから、専任の司書を配置することが唯一の道ではないと思うのです。地域におられる優れた人材が、学校の支援に入ってくださるということにも、大きな教育的な意味があると思いますので、是非、お力の及ぶ限り、ご支援をお願いしたい。

我々も図書館の充実、それから、図書館に配置する人員の充実については、引き続き大きな問題意識を持って取り組んでいきたいと思っています。

それから、学校選択制ですが、子ども達が先生を選べるようにする、学校を選べるようにするという意味では、とても良いことだと思います。一方、西森教育長も触れましたが、子ども達は学校だけで育つのではないのですね。教育する場は学校だけではありません。家庭も地域も教育の場です。しかも、それは学校と同じような大きなウエイトを持っています。

そういう意味で、学校選択制は、私が述べた5つの哲学の中で言えば、対症療法だと思います。根本的には、どこの学校に行っても、どの地域にも素晴らしい学校があるという状況を作り出さないといけないと思います。そういう方向で私達はこれから努力をしていかなければならない。県民の皆さんの期待に応えていきたいと思っています。

## 平井コーディネーター

次は、それぞれの立場で、この取り組み方針をどうやって具現化していくか、或いは活かしていったり、或いは発展させていこうとしているのか、ご意見をいただきたいと思います。

まず、半田座長から、ご意見をいただきたいと思います。

## 半田

私は、落ちこぼれや不登校を全国で一番少なくしよう。それが高知県の教育改革でいいではないかという持論を今も持っています。しかし非常に残念なことに、一期、二期通じてもできなかった。これが忸怩たる思いです。

先ほどの学校選択制について、2人の教育長は非常にきれいな言葉で言いましたが、私は反対です。底辺のレベルアップを図ることによって全体が上がるという視点がなければ、行政も政治も要りません。そういう意味で非常に深刻な問題を抱えているということを1点申し上げます。

それから2点目ですが、これからの教育は、子ども達に生きていくための力を与えなければならない。しかし、見える学力の理科、国語、数学全部の成績が良ければそれでいいかというと、もう一つ、我々がどんな人間を求めているかということ、保護者も我々大人も社会ももう一回考えなくてはならないのではないか。

豊かな人間性などのいわゆる生きる力、見えない学力をどこで求めていくのか。

我々の周辺には素晴らしい自然がある。山があり川があり、鎮守の杜がある。そういう中から県民運動でもう一回子ども達をつくることによって、情操、感覚を高めて、学力ということにつなげていく方法が必要ではないか。

ある先生は、読み・書き・そろばんができれば、感性は養われると言う。私は真っ向からこの考え方には反対です。我々は人間としての必要な感性があり情緒があり、そういうものを養うことによって勉強もしていくのだという観点が、必要だと思います。

それから、今まで我々は教育を入り口から考えていたのではないかと思います。良い幼稚園に行って、良い小学校、中学校に行って、良い高校に行って、良い大学に行って、良い会社に行く。そうではなく、どういう人間が社会に必要なのか。そのためには何が必要なのかという、逆に考えていく発想が必要ではないですか。

私は、暴れん坊だったんです。教師を殴った子です。ただし、それには理由がありました。昔は、差別がひどかったから、我々は郷(ごう)の子といって、周辺の農村地帯の子、山の子ですね。

町の子と郷の子と机を分けて座らせていて、私は郷の子の班長だったのですが、そこには、もちろん地区の子もいました。

それで、昔の先生は竹の鞭を持ってですね、私語が町の子に多いのに、「半田くん、自分の班をもっとしなさい」と、何回も殴られたんですね。それで、耐えかねて、私は先生を殴りました。大きな問題になりましたが、校長先生が中に入ってくれました。私の正義感があったのかもしれませんが。

今、小さい会社でも社長までようきたなと思うのですが、それまでの過程がある。出口からもうちょっと教育というものを見直さなくてはならない。そこに大事なものがありはしないか。

これから欲しいのは各学校の教育力ですね。これは学校では先生がもっていません。個性豊かな先生が働けるような状況がほしいです。

ある高校の先生が、カール・ブッセの「山のあなたの空遠く…」という授業をしていた時に、これに似た歌を詠んだ日本の歌人がおるが知っていたら、全部100点あげるということを言いました。私が若山牧水の「幾山川行けば…」という、これですかと言うたら、その先生、1年中、オール5くれたんです。そういうことが今日の私につながっているのではないかと思います。そのような、より個性を発揮できる教師集団をつくることを考えなくてはいけない。

また、地域の教育力について言えば、昔はうるさいおばちゃん、おんちゃんがありました。そういう土壌づくりを是非これからしていくべきではないかと思えます。

これから先は、少子化で大学なんてどこも、「おいで、おいで」です。それに、皆が東大や阪大へ行かなくてもいいわけです。行く人は行ったらいいんですが、しかし、本当に高知県で我々は、どんな子どもを育てていくかということを、これからの教育行政の中でも詰めていって頂きたいと考えます。

#### 平井コーディネーター

やはり、立場からだけではなく、そこを超えたかたちでの、「未来につなげる会」での議論でしたので、未来のことを考えながら大きなテーマについてもお話をいただけるように、パネラーの皆様には申し上げたいと思えます。

どういう教育が望ましいのか、或いはどういう子どもが育つと本当にいいのか、そここのところがない改革論議というのは本当に浅いものになりますので、今のようなご議論は本当に大事だと思えます。

それでは、関田さん、お待たせいたしました。

## 関田

家庭で子どもをどう育てるか。子ども達の関わりによって成長していく子どもがどう変化していくかということは、すごく大事なことだと思います。

高知県でも、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校と保護者も連携しなければいけないのではないかとということで、協議会もできています。その中で、経験なされた保護者の方が、若いお父さん、お母さん達に子育ての大切な部分について、苦勞もあるけど、楽しいこともいっぱいあるよということを教えて、家庭教育を大事にしてもらうようにすることも大切です。

また、今、「早寝早起き朝ごはん」について県教委が力を入れています。全国的な取組にもなっているのですが、保護者としては、家庭の環境をしっかり高めていくことをしなければいけない。

ただ、高知県では、共働きの家庭も多いですので、本当に苦勞して子どもを育てている場合もあります。また、お母さんだけが育てていたり、お父さんだけが育てているというような事情のある家庭もあります。そんな中では、地域の協力も必要です。

地域活動に保護者も参加して、子どもと一緒に町内会活動とか地域の活動に日頃から参加して知っていただいて、援助を求めてはどうでしょうか。地域の民生児童委員さんという、行政の委託を受けている方もいますので、そのような方達に手を差し伸べて応援してもらい、家庭の中でとじこもるのではなくて、外へも目を向けるようにしてはどうでしょうか。

それと、企業にも、家庭で子育てができるように、残業を余りつくらぬとか、参観日や学校行事に保護者の方が参加しやすいような工夫をしていただくなど、支援も求めたらよいのではないかと考えております。

管理職の校長先生はじめ先生方が学校を開いていただいて、どんどん地域とか保護者の方が入っていける体制をつくっていただきたい。

開かれた学校づくり推進委員会が名前だけになって、会議だけをやって終わっている学校もたくさんあります。そのメンバーも校長先生、教頭先生、一部の先生だけではなく、色んな先生方に委員会に関係してもらいたい。また、PTAの役員だけではなく、多くの保護者の声を取り入れてもらいたい。子ども達の意見も聞いてもらいたい。開かれた学校づくり推進委員会の中で協議がなされ、学校運営ができていくようなもっと形のある、開かれた学校づくりを是非進めてほしいと思います。

高知市の母親委員会は、学校訪問をしておりますが、何校かお邪魔した時に、本当に頑張っている先生と、もう少し頑張りたいなと思う先生がいます。授業も、子

ども達が注目して楽しそうにやっている授業と、そうではない授業があります。

先生は自分の実践については、研修の中で学んで欲しいと思います。また、管理職も先生方の声をしっかりと拾い上げて、職員会議で協議して、学校の中のことは、皆の先生が共有してわかっているというような状態をつくっていただきたいですし、是非、地域とか保護者にも発信していただきたい。

PTAとしても、何かあった時は知らされますが、何かある前に、もっと学校に関わって一緒に考えて行けたら、小さな問題も大きくなるのではないかと思います。

私はPTA会長をしていた時に、職員会議に参加させていただいて、議論の仲間入りをさせて欲しいと言ったことがありました。実際、PTA行事でお願いする時は、職員会議の前段に、ちょっと仲間入りさせていただいてお願いをしたということもありました。

教頭先生にお願いしてから先生方にとくと、なかなか伝わりません。何かお願いしたい時には、直にそれぞれの先生にお願いしたいということもありますので、職員会議もこれから活用していただけたら、と思います。

教育委員会もいろいろな状況を把握していると思いますが、先生方の声、保護者の声、子ども達の声聞いて欲しいです。学校の状況というのは、日々変わっております。現場の状況をしっかり把握して欲しいと思います。

#### 平井コーディネーター

それでは、次に森本さんのほうからお願いしたいと思います。

#### 森本

これからの高知県の教育については小中一貫教育と開かれた学校づくりの実効ある取組が生命線だと思っています。中でも、学習参加・参画は開かれた学校づくりの特効薬だと実感しています。これは実践を通して言います。当初、狙いには、学力向上はありませんでしたが、実践していく中で子ども達の学習意欲につながり、学力向上にもつながってきました。

今日のフォーラムを受けて、私達教育現場の者は一体何をしていけばいいのかと考えていました。一つは、自分の学校の「売り」は、自信をもって継続していくべきだと思っています。それから、課題はたくさんあっても最重要課題一本に絞ってその課題解決のための具体的な手立てをうつ。最重要課題から逃げないということが大事ではないかと思いました。その際、学校を開いて、関係者、専門家の力を借りるようにするということも忘れてはいけないと思います。

中学校の課題解決については、校区の小中学校の教員をはじめ関係者が集まっ

て課題別に話し合いをもち、具体策を実施し、実践を検証していく必要があります。

それから、地教委協力のもとに各校が独自に取り組んでいるものと、市町村内の小中学校が一斉に取り組むものとの区別をしっかりとす。このことは先ほども言いましたが、取り組みの温度差解消にも結びつくと思います。

教育施策を進めていくうえで大切なことは、子ども達の視点、地域の視点、そして協働の視点であると実感しています。学校を開き、いろいろな人の力を借り、温かい心の交流活動を展開することが、課題解決の近道になると思っています。全ての教育課題は、学校を開くことによるのみ解決すると私も思っていますから。

小学校の立場から忘れてはいけないことは、中1ギャップの存在です。小中の段差をどう埋めるかという対症療法的な対策ではなくて、子どもの9ヵ年の成長を促す新しい義務教育のあり方が求められていると思います。例えば小学校低学年から中学生まで、豊かな人間関係を築く力をどう育てていくかというようなことです。

また、そういう力を育てるための体系的指導プログラムの開発や研究が必要だと思います。道徳以外にも心を育てるための時間を積み上げていくということが大切ではないかと思っています。

ささやかな提案が、三つあります。一つは、学校を地域コミュニティの文化拠点にする。簡単に言えば、地域みんなの遊びの場、学びの場にしていきましょうということです。

二つ目は、地教委は、現場に足を運んで、教職員の共通理解のうえで、先ほど言った足並みをそろえた施策を実施してもらいたいということです。

三つ目は、県教委にお願いですが、私立も含めて高知県下の幼保小中高大、各校で、三点にしぼって、各校がうちの「売り」はこれだということを具体的に書く。それを一覧表にまとめてホームページに載せてもらいたい。それを各校はお互いに活用できるようにして欲しいです。

質問には地教委が対応する。対応するためには、足を運んでないと対応できません。そういうようなことは簡単にできるのではないかと思っています。

おわりに、今までの経験上言いたいんですが、元派遣社会教育主事さん、地域教育指導主事さん、ボランティア経験の教職員の皆さん、そして生涯教育に関心のある先生方、立ち上がれと言いたいですね。それから高校生や大学生、そして、これから増えるであろう、教職員OBの皆さん、学校へ行きましょうと言いたいです。

私も退職したら、月100円で仲間を募って学校のために役立てるようなことをしたい。健康状態がどうなるかわかりませんが、そんな構想もっています。

## 平井コーディネーター

非常に元気づけられるようなお話だったと思います。  
それでは、岡村さんからお願いいたします。

## 岡村

私は、学校の先生が子どもと関わる時間を如何に増やすか。私はその1点だけは是非お願いしたいと思います。教育課題解決のために先生はいろいろな動きをしないといけないことは重々承知しているのですが、是非、先生と子どもが関わる時間を増やすという発想をお願いしたいと思います。

二点目は、各学校で地域に根ざした学校づくりをしていく必要があるということです。地域に根ざすということは、やはり子ども、保護者、地域の願いに応えるということではないかと思います。

学校教育に何を求めているのかという全国の調査があります。一昨年の10月ぐらいにインターネット上に公表されたものですが、小学校中学校の保護者、小学校中学校の教員、学校評議員、教育長、首長、それから、小学生、中学生にそれぞれアンケートをしています。

その中で大人は、保護者、教員から首長に至るまで全部、教科の基礎学力が一番にきているんです。ところが、小学生、中学生の1位はどちらも、良い事と悪い事を区別する力です。周りの人と仲良く付き合う力が第2位です。第3位は、それぞれたくましく生きるための健康や、自分の考えを伝える力です。学力はひとつもないのです。

一番が「よい事と悪い事を区別する力」であるということは、逆に言うとそれだけ学校の中で正義が通ってないということではないかと思います。だから、まず、我々は正義の通る、安心、安全な学校づくりをする必要があると思います。その上に学力と文化が育つと思います。

もう一つは、学校のビジョンを明確に示す必要です。こんな力をつけて卒業させたいという出口を明確に示すということです。

それから、課題を共有するという事。「今、学校でこんな問題が起こっています。これについてどう思いますか」、というように、親にも地域にも返して行く必要があるし、生徒にも「今、教室はこうじゃないか。君達はどう思う」と課題を返して行く必要がある。それが課題の共有化につながると思います。

三点目。小学校の教員は、基本的には教育学部の教員養成課程を出ています。

ところが、中学校の場合は、教育学部を出ている教員は非常に少ない。したがって、小学校の先生のような細やかなことができているのは事実であると思います。そこで、6ヶ月の社会体験研修を、例えば大学に行って、教科指導、道徳、特活、生徒指導、生徒理解などについての技法を学ぶようにしたほうが良いのではないかと思います。

#### 西 森

選ばれる学校づくりという発想は、これから先も大事にしていきたいと思っている。それを制度にするかどうかは、また別の次元だと思いますが、私は、やはりこの部分だけは主張していきたいと思っています。

#### 半 田

現実にあそこの学校へ行かせたくないという問題がある。差別的な非常に厳しい実態があるでしょう。その中で学校選択を制度にしたら、頭からその学校の存在価値は無くなるのではないですか。

特色化して、競うのはいいですが、私は土佐の教育改革は底辺からのレベルアップによって、上げていくのが筋ではないかということです。

#### 西 森

先生方はよくやったと思うんです。特に校長先生方は明確な経営ビジョンを持つようになりました。しかし、それで県民が100%満足しているかどうかというのは、これは別の問題ですが、10年前と比べると、私は高い評価をしても良いのではないかと考えています。

その中で、中学校の問題に特化をされました。私は、数学でも国語でも英語でも、どれかに特化して頑張っていけば、他の教科は一緒についてくると思います。全部やりましょうということは、やらなくてもいいということにつながります。そういう点で県教委がいずれかの教科に特化するという考え方には、私は賛成します。

もう一つ、県立中学校は少し課題を抱え過ぎました。このあたりで点検をしないといけないと私は思っています。これらの中学校は、こういう生徒づくりを目指したいというイメージがあったはずですが、私はそのとおりいっていると思わない。志望者が激減をしている現状を、どう私達は検証したらいいんでしょうか。一つの問題提起として、皆さんと一緒に考えていきたい。

その中であって、新たに4月から、本山町に嶺北中学校がスタートいたします。これは同居型の中高ということです。本山は嶺北の学校や文化の生き残りをかけて、総力をあげて学校づくりをはじめています。私達も可能な限り、力をお貸ししたいし、是非お手伝いをさせてもらいたいと思っています。いろいろなことをやってみなく

てはなりません。やってみて、うまくいかない時には、素早く撤退をしたり、改善しなくてはなりません。

もう一つは、南国市内では、多くの校区で小学校の先生たちが小中の9年間について共同責任を持ち始めてきています。中学校に送ったからそれで終わりではない。自分の小学校から送った子ども達に、共同責任を持とうとし始めている。このことにより、ある校区では著しく成績を上げています。

進学についても、著しい成果を上げています。中学校の先生が小学校に行って授業をする。小学校の先生が中学校に行って授業する。それは1年に1回ぐらいはできるかも知りません。それを計画的に、定期的にどう授業で連携していくかということ、数年前から取り組んでいる。著しい成果が上がりつつありますから、そういう方向も大事にして欲しいと思います。

高知県の教育の現状を、四国の三つの県はどう評価しているかという、これは大変厳しい評価だったと思います。一つは、高知県へ転勤になった時に、単身で赴任をする人が多いということは、十数年前から言われています。高知県の義務教育が高まってきたから、家族を呼び寄せようというまでの信頼になってきたかどうかは、もう少し検証が必要ですが、県教委もやるべきことは全部やってきました。

小学校の1～2年生の30人学級。3年生は35人学級、4年生も35学級を実現してきましたし実現する方向にある。やれることは全部やっている。

その中で、中学校の課題が依然として残されていることについて、大崎教育長は、相当、頭が痛いだらうと思います。中学校も30人学級にという意見も強くなってきました。

私も賛成ですが、それには、あれもこれもやった、しかしやっぱりダメだったということになると困りますので、小学校の少人数学級の状況と成果をしっかりと検証しながら中学校の30人学級を実現する方向でお願いしたいと思います。

もう一つは、高知県と香川とか愛媛と比較した時に、研究会で授業をしたら、高知県での授業は相当質が高くなりました。ただ、それを日常化しているかという点では、まだ少し低いと思います。沸き立つような情熱で取り組むことは高知県民の特色だと思いますが、日常化することに、これから先はエネルギーを割きたいと思っています。

平井コーディネーター

大崎教育長に、今までの意見も受けながらご発言いただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

大崎

複数のパネラーの方から出てきた取り組みの温度差、或いは学校間の温度差。「未来につなげる会」から提起された中学校問題。教育は、土佐の教育改革10年でも解決し得なかった大きな課題を背負っていると思います。ただ私達は、これを解決する方法を、ほぼ土佐の教育改革の中で検証し得たと思います。これが最大の収穫ではないかと思います。

それは、「授業の改善」と「学校を開く」という、この二つの方法論です。これをやれば、先生方の資質や指導力は間違いなく向上する。或いは家庭や地域との連携は間違いなく強化される。私はこれしか突破口はないと思います。問題の根本的な解決は、ここから見つかると思います。

もう一つは、教育行政の自己変革が必要ではないかということです。温度差を生じさせた、或いは中学校問題を生じさせた、或いは、我々が正しい方法論を提起しながら、それが教育現場に理解されなかったということは、教育行政の責任だと思っています。

そういう意味で教育行政の自己変革が必要だと思っています。現場の声をもっと聞いて欲しいというお声もありました。そのとおりだと思います。私達はそういう意味もふまえて、五つの視点、五つの哲学を皆様へ今日、初めてご披露しました。この考え方で進んでいくことが、自己変革の皆様へのお約束です。

もう一つは、保護者、子ども達や教職員を含めて、皆様との信頼関係を築かないと、私達の声は届かない。現場の声も私達に届かないと思います。

コーディネート力をもっとつけないといけない。私達がいろんな政策を実現していくためには、現場の皆様ともっと手を結んで、それを実現に至らせるような力をつけないといけない。そういうことを通じて、温度差の問題とか中学校問題とか学力の問題とか、不登校やいじめ、暴力、学校の荒れといった問題を根本的に解決する。

西森教育長が一点集中でいいとおっしゃったのですが、これは僕の持論に全く一致しています。学力の問題が解決してくると、不登校の問題も解決してきます。学校の荒れが収まる中で子ども達は安心して学力を伸ばしていけるようになる。

つまり、教育課題は複数あっても、解決の道は一つだと思います。そういう意味で、これからも授業の改善と学校を開く、この二つの方法論を柱にしながら頑張っていきたいと思っています。

#### 平井コーディネーター

整理のされた、焦点化された今後の取り組みの方針を述べられたかと思っています。

実はもうこの段階で、終わりのご挨拶の予定ですが、一通りパネラーの意見を聞

いていただきましたので、フロアからご意見、ご質問ありましたら、手短に承りますがいかがでしょうか。

#### フロア・男性

校区の小学校と中学校で開かれた学校づくりに関わっております。1回目のフォーラムから参加をさせていただいておりますが、学校選択制について論議がなされたのは、多分、私の記憶では初めてだと思いますので、その意味で非常に歴史的なフォーラムになっているなという感じがします。

ただ、土佐の教育改革では、家庭、地域、学校の連携、或いは、地域の教育力の再生がずっと言われています。それと学校選択制とは、どう整合性がとれるのかなという事に疑問に感じております。荒れた中学校に行かせたくない。それは、わからないわけではないのですが、では、選択制ということで、荒れてないところを探し求めてそこに通学をさせる。すると、自分の住んでいる校区の中学校の荒れは放置されたままになってしまうのではないかと、地域の立場からは感じます。その意味では、土佐の教育改革の精神と学校選択制は、相容れないものではないかと考えています。

私学の問題が出されて、とても関心の高いところですが、私学は県教育委員会の所管ではなく、私学大学支援課という県のポジションが担当しています。私学と連携をしたいというお話が先ほどから出ていますが、果たして私学が相手にしてくれるのかという率直な思いがいたします。教育行政が私学に働きかけることを期待する前に、私達保護者、地域が、私学の後援会組織と連携をするほうが、近道ではないかと思っています。

関田さんに是非お願いいたしますが、私学の後援会と連携をとって、公立と私学の保護者の連携が進んでいくように期待をしたいと思います。

#### フロア 女性

学校図書館のことで、私が申し上げたのは、司書教諭ではなく、司書を学校図書館に置いて欲しいということです。私は30年ほど公立図書館に勤務していましたが、司書には専門性が問われますので、是非、専門職を置いていただきたい。

#### 平井コーディネーター

時間の都合がありますので、図書館の問題については、今後、検討されるという形になると思います。

先ほど、学校選択制の問題と私学との連携の問題が出されましたが、それに対して大崎教育長からご発言があるようですのでお願いしたいと思います。

#### 大崎

学校選択についてのフロア男性のご意見の前段のほうはですね、その通りだと私も思っています。そう思って、前段で私はお答えをしたつもりでした。ただ、十分伝わらなかったかも知れません。

それから、私学へのアプローチについては、確かに県の教育委員会からは、何度かいろんなことを仕掛けたことはありますが、これはほとんど通じません。そういう意味で、フロアの男性のご指摘はこれもあたっていると思います。そういう意味で、PTAのほうからアプローチできるのであれば、是非やっていただきたい。私も引き続き努力したいと思います。

それから、学校図書館についてのご意見については、私は全く誤解をしておりません。ただ、私の答え方が悪かったので誤解されたかも知れません。現状を述べました。それから、人員配置は是非したい。しかし今の高知県の財政力では、なかなかそれが難しい状況にあります。従って、市民の方で学校に協力しようという思いのある方があれば、そういう方のお力を学校に借ることは、図書館の問題だけでなく、教育課題を解決するうえで非常に大きな意味をもっていると考えます。先生方の意識を変えていくうえでも大きな意味をもっていると思うので、是非引き続きお力を借りたいという思いでございました。

**関田**

私学と連携については、今、幼稚園は私立幼稚園連合会が、保幼小中連携の中で一緒に活動しております。小中高になると、なかなか、学校の運営上ということを言われますので難しさがあります。後援会とPTA組織の違いはありますが、連携は必要だと思います。家庭においては公立に行っている子どもさんにも私学に行っている子どもさんにも同じ保護者になりますので、また私達も働きかけをこれから考えていきたいと思います。

**平井コーディネーター**

半田座長お願いいたします。

**半田**

学校選択制と地域の教育力の再生は整合しないと思います。福祉の問題など、地域によって本当に深刻な問題が出ています。そういうことも含めて、学校現場だけではなく、地域全体、行政全体が教育力の再生を支えていかなければならないと考えています。

**平井コーディネーター**

ご発言があった3人以外のパネラーさんで、締めくりのご発言をお願いいたします。

## 西 森

学校選択制についての発言の趣旨は、どの学校も地域に信頼される学校づくりを一層目指して欲しいということです。

そして、特定の学校を排除するような選択制は、断固拒否しなければなりません。私達はそれぞれの学校が校長を中心にして、うちの学校はこんなをしたい、こういう子どもを育てたいということを支援することを、これからも続けてまいりたいと思います。

## 岡 村

今、議論されていることは本当に目先というか、今ある課題についてですが、あまり目先のことだけ考えていると、へんな方向に行ってしまう可能性があるとは私は危惧しています。教育は、百年の計と言われていています。ずっと先をみる必要があると思います。

私は、甘やかすと、飽食は人類を滅ぼすと考えています。過去の高度な文明、或いは中国の歴史からでも、滅びの歴史を今こそ学ぶ必要があると考えています。ある先生から、「少しの寒さと少しの飢えは絶対経験させんといかんぞ」と言われました。私も親として、子どもには何不自由無く育ててもらいたいという気持ちは十分ありますが、鍛える、我慢する、堪えるということは大事だと思います。

ちょっと記憶が正しいかどうかわかりませんが、大野勇さんという方の「凡語集」という本があるんですけども、その中に、本の一番最初に「人生も世渡りもこらえることから」という言葉があるんです。我々人類の将来を託す子ども達を鍛えるという発想も是非もっていただきたいと思います。

## 森 本

現場は日々ドラマです。子ども達に愛されて、そして保護者に愛されて、地域の方々に愛される、そんな学校づくりを仲間と共に丁寧に進めていきたいと思っています。

## 平井コーディネーター

どうもありがとうございました。

これから学校や行政と共に、より良い方向で話し合いながらつくっていきける、そんな高知県の教育であつたらいいなと私も思っております。

本日熱心に、このフロアでこの議論にご参加いただきました皆様、本当にどうもありがとうございました。以上をもちまして、パネルディスカッションを閉じさせていただきます。

終 了

